

FAVORITE 展は毎年行われている。私はこれまで FAVORITE 展をステップスギャラリーと結びつけていたが、今回の展示を見て考えを改めた。この展示会は、吉岡まさみによるものである、と。ステップスギャラリーで個展を行う/行わないは関係なく、吉岡と関わりのある「作品」によって構成されるのだ。この展示会は吉岡の一つの「作品」であるということができるのかも知れない。しかし立ち並ぶ作品のそれぞれの意図は剥奪されない。吉岡は制作したアーティストとの「関わり」をも

「作品」の一部として包括している。そのため FAVORITE 展は単なる吉岡の好みに陥らず、展示会の枠を超えて作品として息吹を始めるのだ。

前田精史が鉄を 13 点、串田治がアクリルを 4 点、浜田浄が平面を 7 点、吉永裕が和紙を 2 点、中澤小智子がアクリルとブロンズを各 2 点計 4 点、ウテ・ザイフェルトが紙に染料とした紅茶で 6 点、ミクストメディアを 3 点、出品し



た。単に素材を明記したが、無論、各人それ以外の様々な物質を盛り込んでいる。手法もサイズもそれぞれ異なる。吉岡は早々と、ブログで各アーティストの作品の特徴を論じた。吉岡がそう書いたからこそ別の者が詳細な作品分析を行う必要があるのだが、私はここでは先ずは全体像を論考することにする。いずれ場を変えて、個々の作品と向き合っていきたい。



Web で作品群を目にした時、「スクラッチノイズ」が共通項として見出せるのかと思ったのだが、実見すると、個々の作品が前方に迫り出してくる印象を強く受けた。躍動感と生命力が強固に発生しているのである。書き慣れたことを深く反省すると共に、批評の可能性をもっと信じなければならないと実感した。

巷では現代美術の市場がないことが問題になっているが、それよりも前に、吉岡が言うように、現代美術には批評が不可欠だ。Part2 も楽しみである。